

series Salamander in the circle

リ・コンストラクション

第三部

第二十章

Materialized Sun Rays

峯村 明

リ・コンストラクション

[登場人物](#)

[21・Materialized Sun Rays](#)

[208.](#)

[209.](#)

[210.](#)

[211.](#)

[212.](#)

[213.](#)

[214.](#)

[あとがき](#)

[奥付](#)

登場人物

桧山 健	27歳の実業家
A. V. ラウレンス III	H&L財団代表
アランデル・アウレア	ポルタアウレア公国の現大公
エドミール	〃 皇太子

21・Materialized Sun Rays

208.

ポルタアウレアは国土が狭い分、さまざまな機能が宮殿中心にコンパクトに収まっている。

瀟洒な宮殿と行政庁舎とは隣り合っていて、現実的な用件で庁舎を訪れる市民は同時に、灰色が勝った石灰岩と金で装飾された宮殿の建物がアドリア海の明るい太陽に柔らかく輝くのを目にした。誰でも通りぬけられる庭園内では噴水がきらめき、バラは一年中咲き、宮殿のどこかで一流の音楽家が演奏する楽器の音色を楽しむことができた。近所には防音された劇場もあったが、宮殿では市民を楽しませるためにわざわざ音を漏らしていた。

建築物も街の作りも古い歴史があって美しく、余裕と成熟が存在した。

その日の夕陽が海を染め、沈み、仕事を終えた人々が夕餉の食卓に着くころ……

どんがらがっしゃあ〜ん

色気も身もふたもない大音響が宮殿に響き渡った。さらに、…がしゃん…しゃん……ぱりん……と不吉な音が続く。

奥まったプライベートエリアの客間で食事中だったひとりはワインを吹き、ひとりはナイフをテーブルに落とし、ひとりは左胸を押さえた。

給仕たちはまさかのテロかと身構え、皇太子殿下はずっと立ちあがった。

「こ！ この音！ この音の方角はもしや——！！」

そして脱兎のごとく部屋を飛び出して行く。

はたして、公共エリアの廊下の角を二つ曲がったところにある広間で、曲者がふたり、ガラスの破片の中をのたうち回っていた。

「きさまらー！！！」

上品な皇太子殿下とも思えぬ声と剣幕である。

「きさまら、よく私の力作、『バラの花園』を粉々にしておって——！！！」

それは巾三メートル、高さが五メートルもある素晴らしいステンドグラスだ。……った。宮殿の東面の一画を占め、内部は謁見の間。訪問者は統治者の愛に包まれ、日中は床にバラの花園が光となって現れるというものだ。……った。それをいっしゅんで粉々にされたら殿下でなくても、誰だって怒髪天をつくだらう。

「あーちょっと考え事してた……わかった」

「バイスロイさん、ヒューダーを怒らないで！ ぼくがいけなかった、ぼくが目測を誤った！！」

人間の姿のイリチャが目をうるうるさせてバイスロイにとりすがる。バイスロイの怒りの矛先がまっすぐヒューダーに向けられているのは誰の目にも明らかだったから。しかしバイスロイは情け容赦ない。

「コレを作り上げるのにどれだけ精魂込めたか、きさまにはわからん！！！」

「だから～わかったって」

イリチャはいいかけるヒューダーを止めて、立ち上がり、ガラスの破片の山に向かって両手を指しつけた。そして右手で指をぱちりと鳴らす。

すると——

「え？」というほかなかった。逆再生の動画をみているようだった。それも立体の動画。砕けたガラスはふわりと浮き上がり、本来あった場所へ、するすると戻って行く。色も形も元通りになるのに三分とかからなかった。破片のつなぎ目などない、まったく元通り。まるで魔法だ。

「おお！」と静かな歓声があがったが、ヒューダーだけはついでに、「元のより見事だな」、と余計なことをいうのを忘れなかった。イリチャはバイスロイをなだめるのに大忙しである。

ヒューダーの戯言に気を取られるなどばからしいと気づいたバイスロイは、ようやくイリチャに目を向けた。

「きみは魔法使いだったのか！ どれ、よく顔を見せて——」

「おくれ」、という前に、ぐいっと押しつけられた。「父上！？」

大公アランデルは目を見開いてイリチャを見ていた。右手の平のなかに、何か握り締めている。

「そなたは——このモデルに似ておる——」

「いや父上、何を持っておられるのです、それはなんですか」

209.

それはメダルだった。一面に台形ピラミッド、もう一面に人物の横顔。アランデルは、横顔の人物がイリチャに似ていると言ったのである。

健とラウレンス氏は興味をそそられて、大公の手の中をのぞき込む。そしてふたり揃って、(ほんとだ)と思った。次いでラウレンス氏は「メダルに鑄造した技術も素晴らしいですが、モデルを観察する目もデッサン力も素晴らしい！ 超一流の画家の仕事でしょう！」と、大絶賛しつつ、ちょっと拝借、とメダルを手にとった。

その超一流の画家の張本人はすべての不機嫌を払拭され、縦ロールの黒髪をかき上げている。

"ベレオーサ"、"年号を表す数字"、"神の代理人"、とラウレンス氏は人物の周囲に刻まれているこの世界の言葉ではない文言を読んだ。台形ピラミッドの面に文言はなく、ピラミッドを細くうねるへびが取り囲んでいる。

彼は眉をひそめる。このメダルは、おかしかった。人物面は金色だがピラミッド面は灰色なのだ。裏と表で色が、おそらく材質が違うのである。

髪をかきあげて悦に入ってる時ではないと皇太子殿下は気がついた。「このメダル、どうされたのです？ なぜ父上がお持ちなのですか？」

「……セーラムのごく私的な持ち物だった。謂われはわからぬ。しかし……」

アランデルはイリチャをまじまじと見、それから息子を見た。

「こういうことなのか？ 神の代理人……？」と、イリチャを指さす。

「そして、もしや……彼の横顔を刻んだのは……」

父親が発作を起こすことを息子は恐れた。しかし、このメダルを、ポルタアウレアの先々代大公セーラムがひそかに持っていたということの方が重大ではなからうか。と、なれば——とうに過ぎ去ったとはいえ、うやむやにできない事柄なのだ——

「父上、私が、説明します。かなり長い話ですよ。筆者があれこれこね回しましたから¹」

「ちょっと待てバイスロイ。おまえはたしか、志半ばであえない最期を遂げて、丹精込めて作ったメダルがどうなったか知らないのでは？」

「ぐ……なんできみがそんなことを知ってるんだ」

「こいつの首をしめて吐かせた」

「あ、あたりさわりのないことしか話してないから安心して」

「あたりさわりのあることがあるということか。イリチャあとでゆっくり話し合おう」

「まあまあまあ。これでは話がさっぱり進みません！ バイスロイさんが亡くなった後のことは私が」

アランデルは大きく息を吸い込んでのたもうた。「諸君らの意気投合ぶりは実に喜ばしい！ しかし私は空腹である！ 食事の途中であったからな！ 長い話ならば空腹を満たしてからにしよう」

ばらばらと声があがった。「賛成です」「御意」「異議なし」「goo」

210.

イリチャのプロフィールが刻まれた黄金のメダルについては熱心な読者諸氏はよくご存知であろうが、そうでない読者もおられようから、筆者からかいつまんで説明させていただこう。

そもそもこのメダルはアンブレオ王国がメッサナ市を支配下に置いた記念として考案された。メッサナ市はその後、新総督の家名をとってベレオーサ市と改名される。メダルに刻まれるのは

¹ 必要だったんです！！

アンベレオ国王レガリオ七世、メダルの図案化が旧メッサナの複数の芸術家に課せられたが、図案がモデルから程遠かった。

メッサナ市へ侵攻し、芸術家を使い捨てにしていた先遣隊の女隊長シパドは、芸術家を自称する怪しい外国人バイスロイに目をつける。バイスロイは地下のミクトランから地上へ帰還したばかりだった。実物を見なければモデルを描写することなどできないという彼の主張に従い、彼はアンベレオ王国へ送られる。

しかしここでアンベレオが崇める秘密の神から突然横槍が入る。国王レガリオではなく、一少年に変更になったのだ。アンベレオの王宮で篤くもてなされていた高位の少年とは、イリチャだった。

なぜイリチャがアンベレオ王国に。

バイスロイはいつか、地下のミクトランを旅した。その時のメンバーがネウトラ評議会のダーヴェとヒューダー、イリチャだ。ほかに二名いたが彼らは途中でミクトランを脱出しているので省かせていただく。

旅は地上を侵略する恐怖の巨人族を追及してのものだった。彼らはずいに地下世界で巨人族が人工的に量産される場を発見するが、主導する者の、彼らの上位者に対する背信行為が発覚。上位者の怒りは激しく、主導者たちをミクトランごと封じ、彼の意志ひとつで巨人族は無かったことにされてしまうという、おそろべき力の持ち主だった。

ミクトランを封じるという彼の決定に、イリチャは驚愕、そこにはまだダーヴェたちがいるからだ。彼らを地上へ帰し、助けてくれとイリチャは懇願するが、ネウトラ評議会の恐るべき爆弾が地上を蹂躪する巨人族もろとも、生物が住めないほど大陸を汚染してしまったと知り、激しい脱力感と無力感に襲われる。ミクトランの上位者は無気力に陥ったイリチャを連れ去ってしまう。

そのイリチャが、アンベレオ王宮で誰も手を触れられぬほど、厚遇されていた。ミクトランから彼を連れ去った男＝冥界王はイリチャの実の父親だったのだ。しかし冥界王なる人物が人間の生贄を要求する暗黒神であると知ったイリチャは、冥界王の計り知れないスケール、受け入れ難い真実、己のあまりの無力さと無価値感に押し潰されていた。

製作途中のメダルの最後の仕上げにベレオーサ市(旧メッサナ市)へ戻ったバイスロイは、新総督となるベレオーサ家のシパドから一方的に結婚相手と見なされていた。ここで保身のためについた嘘が著しくシパドを刺激し、総督就任式で大惨事を招くことになる。権力者となっていっそう際立つ彼女の奇矯な性格を、バイスロイは嫌悪する。その一方でシパドの彼への異常なまでの執着を利用すれば、シパドを御することが可能かもしれないと気づいた。

ネウトラ評議会の爆弾の罪を負ったダーヴェとヒューダーはベレオーサ市にて極刑と決まった。巨人族をずっと追っていた彼らに何の関わりも罪もないこと、ほかにもシパドの数々の残虐な行為を知ったバイスロイは自らシパドのもとを訪れベレオーサ家-黄金門市の婚姻を提案する。新総督の慶事は大々的に公表され、罪人はすべて恩赦された。しかしかつてのバイスロイを知っている芸術家仲間たちは彼を裏切り者と罵ったのだった。

211.

「——というわけで、このメダルはイリチヤをモデルに私がーから作り上げたのだ」

「最後の仕上げはベレオーサ市だったのですね。それはどこで？」

「『化学者の館』。メンドルプ代表は追い出され、彼の部下たちは、言うことを聞かなければ市中に火を放つと脅され、館に残った」

「なるほど、メダル鑄造は化学者たちがおこなったということですか……」

レガリオ七世を総督府に向かえた、あの最後の晩。とつぜん、空からメダルが降ってきました。まさに雨のように降り注ぎ、地面に積まりました。人々は最初は恐れおののき、誰かが「金だ！」と叫んだとたん、恐怖は狂喜にとってかわり、メダルの奪い合いが始まった。地面に積もっているというのに、奪い合ったのです。老人も子どもも、男も女も、互いに押しのけ合い、抱えきれなくなってもまだ奪い合った。彼らの目は血走り、叫ぶ言葉は汚れていた。金によって人々の隠されていた一面が現れいでた、恐ろしい光景だった。

私は問わずにいられなかった。何故？ 何故、こんなことをする？ 人々を大混乱に陥れ、どうしようというのだ！？

それから……不意に状況が変わりました。黄金のメダルは降りながら鉛と化したのです」

だれかが呟いた。「鉛？」

「そう、鉛です。人々が抱えていたものも、みるみる鉛に、灰色の砂へと変わってしまった。ねえ、一瞬のうちに、今まで金だったものが鉛に、希望は絶望に、天空から地の底に、人の心はこんなことに耐えられません。あまりに……残酷がすぎる……」

私は疑った。黄金のメダルが撒かれたのは、人間の心を壊すためだったのではないかと」

みなは静まり返った。

「が……メダルの鑄造は化学者たちがおこなった。彼らは市民を人質にとられていたのだ。となれば……彼らは黄金に何かしかけたのではないか。大量の黄金がアンベレオの、また、一般人の手に渡らぬよう、細工をしたのでは？ 卑金属を貴金属に、その逆も、彼らにはできるはず」

ラウレンス氏はテーブルに置かれていたメダルを手にとった。

「これをセーラム様がお持ちだったということは——」

「もしや——ポルタアウレアの大金鉱とは——」

212.

「——そもそも、金はどうやってできるのか。」

マグマから放出される熱水に金が含まれていて、それが地下水の通り道である岩石の割れ目に沈澱してできたのだ、とよく言われますけどね、これは金鉱山のでき方であって、金のでき方じゃありません。

地球の表面を構成する地殻に含まれる金の割合はわずかに10億分の2で、金は密度が高いので地球の深部により多く存在しています。

地下3000キロの深さにある核では金の割合は10万分の1と推定されますが、あまりに深くて取り出すのは不可能。マグマの活動によって地表近くへ運ばれてきた時によりやく採掘できるわけです。

マグマ中に含まれていた金はどこから来たのか、と問わねばなりません。

実は、金はもとより、鉄よりも重い元素(銅、銀、プラチナ、ネオジムなどのレアアース、ウランなど)は、恒星の内部で起こっている核融合反応では生成されないのです。地球内部の温度と圧力では到底できるものではありません。だから、地球が形成された時にはすでに地球内部に含まれていた、ということになります」

みな目の目はラウレンス氏が弄んでいるメダルに集中している。

「が……作っちゃう人たちがいた、んでしたね」

「メッサナの化学者」

「ええ。彼らにとってはそれほど——貴重なモノではなかったらしい。もっとむずかしいモノはいくらでもあった。しかし、これほどやっかいなものはない。有り余る金を前にして、ひとを盲者にし、狂気の獣のようにしてしまう様子を私はこの目でみました。金を扱うには、高い徳性、倫理性が求められる。メッサナの化学者にはその資格があった。彼らは貴金属から卑金属へと転換させることによって資格に欠ける者たちから金をとりあげた。それがこれです。セーラム様はポルタアウレアの新たな金鉱でこれを見つけたのでは」

「ということは……」

ラウレンス氏はうなずいた。

「おそらく、ポルタアウレアの新たな金鉱はメッサナの化学者によるもの。じょうずの手から水が漏れたのか、あるいは"署名"だったのか。

このメダルが造られた経緯、経緯に伴うドラマ、モデルとなった者、モデルをデッサンし鑄型を造った者、いずれもはっきりしている。

そして、この半分金、半分鉛のメダルを見れば、そのように推論されるのです」

*

「ラウレンス先生」

「なんでしょう。エドミール」

「黄金とは物質化した太陽光線である²」

「——あ」

「私はあなたからそう教わりましたが」

すると、健もまた、はっと反応する。

「金のエネルギーは実際、太陽から放射される電子力であり、極端に高く振動する。人々はこの金属を普通に用い、そのとき精神的発展はきわめて高い状態に達する……たしか、メッサナとは黄金時代を象徴する都市だったのだという文脈で、その話が出たんだった……」

「そうだ。金の自然放射は、世界の原子構造のバランスを保持し、清浄化し、活性化させるエネルギーであると……」

「ぼくもその話、憶えてるよ。一番しょうもない使い方は両替、だったけ？」

興味深げに耳を傾けていたアランデルだったが、つい相好を崩した。

「なんと。両替が？ もっともくだらないというのか！」

「本来の存在意義からもっとも外れた使い方をしている。われわれはまさにその時代を生きているのですよ。父上」

213.

秘密の教えはいう。

それは偉大な光存在、創造主がその手で地球内部に置いたのだ、と。

しかしてその目的は？

² 『明かされた秘密・第二章』ゴッドフリー・レイ・キング

天体を創造し、管理し、そこに住む生物の進化を導くためである。

太陽からやって来るエネルギーを地球内部に供給し、地上と地中において清浄化、活性化し、世界の原子構造のバランスを保つ。

今日の科学は、この活動を少しも知らない。

過去のあらゆる黄金時代、人々はこの金属を普通にたくさん使い、人々の精神的発展はきわめて高い状態に達した。

そのような時代では金は決して貯蔵されない。大衆用に広く配給され、人々はその浄化エネルギーを吸収し、さらに偉大な完全さに上昇したのだ——

214.

あれから半年……

エドミールは珍しく健から電話を受けた。

「ハロー？」

《どうも。次のピアノレッスンの後、うちへ寄ってかないか？ アデレードには当分帰ってこないだろうから、いっしょに食事でもと、ママヤが》

「おお、なんとうれしいことを。しかし残念だが、レッスンが終わったらすぐに戻らねばならんのだ。その、母の具合があまりよろしくなくてな」

《……そうか……それは心配だな》

エドミールの母、現大公妃はロシア人で、元バレリーナなのだった。アウレア家は結婚相手に家柄や血統より能力を重視する傾向があった。明朗快活でとても美しい人なのだが、一年ほど前に自慢の脚をケガしてからふさががちで、あまりおおやけの場にも出たがらないのだという。

「ん、ブリュッセルへ行く前に日本でママヤの父君に会うことになってるし。スケジュールの調整に四苦八苦してるところだ」

この話になると、健は「おたくの忙しさは、週の半分くにとアデレードを往復してるせいだろ」と言うが、エドミールは取り合わない。「天才児を教え、その成長をリアルタイムで経験するなど、一生に一度あるかないかだ」と反撃する。

その天才児は健の息子で、父親の方はあまり嬉しく思っていないことをエドミールは感じているから、この話題には深入りしないようにしている。父親が「ノー」と言ったら息子は迷うことなく従うだろう。それは支配-被支配のようなものではなく、絆、なのだ。イリチャが現れてからはそれがますます顕著になっている。

母親もそれをわかっていて、「真はパパさえいればいいのよね」と嫌味でもなんでもなく、屈託なくけろっとしている。

……それにしても、真の音楽の才がどこから来たのか、誰にもわからないのだった。

「で、きみのところは揃って直接、"向こう"へ？」

《ああ、オレだけ先に行って、奥さんと子供はしばらく日本に置かせてもらって、とか考えたんだ。できればそうしたい》

「ふふん。ご息子が淋しがるんだろ」

《まあな。財団のスケジュールと照らし合わせても、残念だが今回、日本はパスだ。ところで、おたく、フランス語は読める？》

「フランス語？ ロシア、イタリア、ドイツ、英語、なんだって読み書きできるぞ。アジアの言語はさっぱりだけど」

《フランス語で書かれた本を持ってるんだ。著者はA.V.ラウレンス一世》

「え」

《六年前から持ってるんだがフランス語まで手が回らなくて結局読んでないんだ。おたくに譲るよ。キリガミネ探訪》

「ラウレンス先生のご先祖の著作か！」

《真に持たせるから受け取ってくれ》

「わかった」

《じゃあ……ブリュッセルで会おう。ご母堂、おだいじに》

「merci」

電話を切ってから、半年前、イリチヤが別れ際に言ったことをなぜか思い出していた。

《てんもうかいかいそにしてもらさず、って知ってる？》

《神々はなにも見逃さないってさ……諦めちゃ、ダメだよ》

それは彼だけに向けた言葉だったのだが、なにを諦めるなというのか、エドミールにはよくわからなかった。

20・「Materialized Sun Rays」

21・「」へ続く

あとがき

ここまで第三部。

サブタイトル『Materialized Sun Rays』は Salamander in～ 第二十二章『物質化した太陽光線』に同じ。

エドミール＝バイスロイ、ラウレンス＝ダーヴェ、それからイリチャが登場。なんだかんだと説明ばっかしのターンでしたねえ。けど、説明してるうちに、あ、そうだったのかというところに落ち着きました。(筆者ひとりが納得しているの図)

十九章でペイリーさんがグライダー相手に語ったことは、偶発的といいますか、タイミング的なものでして、本編とは関係ないかも。

今まさにそういう周期が巡ってきている。太陽系が別の太陽系と交差しようとしている。

第四部からはブリュッセルへ舞台が移ります。

2025年7月7日 記

奥付

リ・コンストラクション

第二十章 Materialized Sun Rays

2025年 7月10日初版発行

著者

峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材

[イラストAC](#)

制作

Puboo

発行所

デザインエッグ株式会社